

## 大仏様の部材寸法の規格化について

## —大仏様研究史の関連性からみて—

## On the member size in Daibutsuyo

## —Considering through relevance of studies of Daibutsuyo—

菱屋実菜子<sup>1</sup>Minako Hishiya<sup>1</sup>

Abstract: Daibutsuyo is a new architectural style invented by Shunjobo Chogen in the Kamakura era. One of character of Daibutsuyo is known as member size. This study points out a new viewpoint of this character.

## 1. はじめに

鎌倉時代初期、東大寺再建のために、重源より中国から伝来した建築様式である大仏様は、その意匠及び構造上の特異性や史的意義の大きさから、これまでに多くの研究が蓄積されている。山之内誠<sup>\*1</sup>は、大仏様研究の全貌を把握する際の一助として、先行研究における主要な論点を、重源の関わった建築と、大仏様の源流の視点からまとめている。そこでは論文の要旨を紹介するにとどまり、相互の関連性についてはあまり触れられていない。本稿では、先行研究において、その関連性を整理するとともに、今後どのような視点が必要であるのかを探る。

## 2. 研究方法

本稿では、大仏様建築について、現存する遺跡のうち、主として重源が直接関わった可能性がある建築について述べられた論文を対象とする。具体的には、浄土寺浄土堂（1192年建立）、東大寺南大門（1199年再建）、東大寺開山堂（1200年内陣方一間部分再建）、東大寺鐘楼（1210年建立）の4つの建築である。このうち、東大寺鐘楼については重源の死後の建築で、他の大仏様の建築とは異なる技法をもつが、大仏様を多く取り入れていることから取り上げる。また、大仏様の源流を中国の福建地方などに求める論考も合わせて取り上げる。

## 3. 部材寸法の規格化について

部材寸法の規格化は大仏様建築特有な要素のひとつであるといわれている。まず、大岡実<sup>\*2</sup>は東大寺南大門について各部材の総容積は①貫等 35.5%、②柱 20%、③垂木 10%、④斗 9.3%、⑤虹梁 6%で、これらの合計は 80%となるから、わずか5種類の部材で建物の殆どが出来あがるとしている。また①の貫等には、挿肘木・通肘木・小屋繋・秤肘木・角桁・貫・地覆・尾垂木が含まれており、これらの部材断面が成 1.25 尺、幅 0.7 尺で統一されていることから、東大寺南大門においては部材断面の種類が非常に少なく、工作作業を非常に

簡単に行うことが可能になったとしている。しかし、この大岡の論考には、その分析方法や根拠となる数値全てが明らかにされていないことから、佐藤隆久<sup>\*3</sup>は、南大門の全部材の寸法値を整理し、全部材を対象とした材積率、構造材だけを対象とした構造材積率を求めている。佐藤はこの分析方法に基づいて、東大寺開山堂、東大寺鐘楼及び浄土寺浄土堂についても検証しており、その中でとくに部材断面の統一化について注目し、その結果は以下のようにまとめられる。ここでいう部材断面の統一化とは、複数の部材断面で同じ寸法が用いられているという意味である。

## ①部材断面の統一化が見られる部材群

各遺構ごとに見てみると、南大門では、軸部部材（挿肘木・通肘木・小屋繋・秤肘木・角桁・貫・地覆・尾垂木）や、大屋根を支える部材（丸桁・母屋桁・棟木中央材）の2種類、開山堂では、南大門と同様の軸部部材や屋根を支える部材に加えて、内部空間を構成する板材（嵌板・壁板・床板・縁板）の3種類が挙げられる。鐘楼では、屋根を支える部材（斗付肘木・斗付通肘木・斗付臺股）や、桁材（軒桁・側桁・母屋桁・棟木）に加えて、梵楼を支えるための軸部の主要構造材（角桁・地貫・内法貫・飛貫・頭貫・束、丸柱・鐘釣虹梁、際柱・際柱上の束の3種類の部材群）の5種類について断面の統一化が見られる。一方、浄土寺浄土堂では、断面が統一化された部材群は板類（嵌板・内部床板・外部縁板）の1種類のみで、主たる構造材には断面の統一化は見られない。

## ②部材断面の規格化の意図

①の結果から、部材断面の統一化は大仏様建築のうち、とくに東大寺伽藍建築に特有のもと考えられる。東大寺の諸建築の大仏様と浄土寺浄土堂の大仏様とで違いが出る理由は、軸部強化のための構法上の工夫が挙げられる。たとえば貫の技法についてみると、田中淡<sup>\*4</sup>が具体的に2者の違いに触れており、浄土寺浄土堂では、胴張をもった飛貫や地貫が柱に対し胴突きとなり

1 : 日大理工・院（前）・建築

二間通しの材は用いないのに対し、東大寺南大門では縦横見廻しに貫を貫通させ、四方出しというきわめて複雑な仕口となる。部材断面の統一化を図ることが、この複雑な仕口となる部分を、ある程度容易に把握できる役目となったと考えられる。

佐藤は以上のような論証をする上で、意図的に部材の材積率が高い順に注目している。そのため、数値が低いものについては詳細に述べられていない。たとえば浄土寺浄土堂の場合では、挿肘木(側廻り・側廻隅行)、秤肘木(側廻り)、肘木(側廻壁付・内陣柱大斗上・内陣)の5つの部材が成 0.70 尺、幅 0.48 尺の同一断面をもつが、全部材に対しての材積率は 2.98%で、先の浄土堂で断面の統一化が見られるとする板類や、一種類ではあるが同一断面をもつ虹梁や束などの材積率が 10%前後であるのに対し著しく低いことから、取り上げられていない。また足固め貫・大引き・内部根太の3種類が成 0.4 尺、幅 0.35 尺の同一断面をもつが、大引きと根太は野物材として扱われることから、規格化の対象から外している。これらをあえて取り上げるとすれば、東大寺諸建築より早い段階で建立された浄土寺浄土堂の部材寸法に、すでに規格化意図が見られるといえよう。

#### 4. 和様の技法と大仏様の技法の混在について

大仏様建築の各遺構の中で、多様な要素が見られることについて、その原因のひとつに和様の技法が混入していることが挙げられている。まず、東大寺南大門については、後藤治<sup>\*5</sup>が棟木と軒桁の反りの技法が対照的であることを指摘している。南大門の棟木は3丁に継がれ、中央のものは直材、左右のものは妻にいくに従い成の増しをつけている。またこの左右の棟木は、棟木を受ける円東大斗肘木上の斗の敷面高等により、折り上げられている。一方で軒桁は、成の増しをもたない直材で、軒の反り上がりに対応するために六手先目上の軒桁の上面に添木が打たれている。後者の添木を打ち軒反りにあわせる技法は、大仏様の導入前には見られないものであることから、これが大仏様特有の技法のひとつであるとしている。浄土寺浄土堂については、林良彦<sup>\*6</sup>が、周到的な技法とやや粗放な技法が混在していることを指摘している。前者は実肘木の断面寸法が成 0.4 尺、幅 0.4 尺のものと、成 0.6 尺、幅 0.4 尺のものがあり、これらを実肘木下が大斗を並べるものについては成 0.4 尺、大斗一個で受けるものについては成 0.6 尺と使い分けている点で非常に合理的であるとしている。後者は、足固め貫について、柱が建ち上がった後に入れるために、貫穴に水平方向に余裕を

持たせ、貫を入れた後に縦方向に埋木を用いている点を挙げている。林は以上のふたつの技法が和様の、大仏様のであるとの区分はしていないが、南大門で和様とされた部分である部材が、規格化されない部材寸法を用いていた点を考えれば、浄土堂の周到的な技法といえる部分に、和様の技術に精通している工匠たちの意識が表れていると考えられる。最後に、東大寺南大門、浄土寺浄土堂の両者について、田中淡<sup>\*7</sup>は、その軸部の主要な寸法に用いられた明快な寸法比例が、中国の北宋時代に編集された建築書である营造法式と相通するものであることを指摘している。この田中の指摘から、規格化された部材寸法に中国的要素が含まれていることがいえる。

#### 5. まとめ

これまで大仏様の部材寸法の規格化について、東大寺の一連の復興事業のなかで、その大勸進であった重源により編み出された方法ではないかとの見方があったが、浄土寺浄土堂でもその先例と見られる部分があること、部材寸法には中国が源流となる性格も持ちあわされていることから、東大寺の諸建築のみで語られる特徴ではないと考えられる。また今後、大仏様の諸建築で和様の技法が見られることについて、その創建には宋人工匠、日本人工匠の存在があった点に注目すべきである。

#### 参考文献

- \*1 「大仏様建築研究の現在—研究史における主要な論点—」南都仏教 (88)、南都仏教会、2006
- \*2 「重源と大仏様」、『南都七大寺の研究』、中央公論美術出版、1966
- \*3 「東大寺南大門における部材寸法の規格化について—大仏様における部材寸法の規格化に関する研究その1—」日本建築学会計画系論文集第 593 号、2005
- 「東大寺開山堂及び鐘楼における部材寸法の規格化について—大仏様における部材寸法の規格化に関する研究その2—」日本建築学会計画系論文集第 598 号、2005
- 「浄土寺浄土堂における部材寸法について—大仏様における部材寸法の規格化に関する研究その3—」日本建築学会計画系論文集第 602 号、2006
- \*4 「中世新様式における構造の改革に関する史的考察」、『日本建築の特質』、中央公論美術出版、1976
- \*5 「東大寺南大門の化粧垂木と軒桁」、『大仏様 普請研究 No.28』、1989、普請研究会
- \*6 「浄土寺浄土堂の技法」、『大仏様 普請研究 No.28』、1989、普請研究会
- \*7 「大仏様建築—宋様の受容と変質—」、『論集 鎌倉期の東大寺復興—重源上人とその周辺—』、東大寺